



学校だより

葦

11号

令和7年2月28日

学校教育目標 自主・自立～活力と魅力あふれる学校を目指して～

市川市立福栄中学校

## 1・2年生「あすチャレ！スクール」開催！！

「あすチャレ！スクール」とは日本財団パラスポーツサポートセンター主催のパラアスリート講師たちによる教育プログラムです。本校では1月24日（金）2年生（神保康広講師）、1月28日（火）1年生（根木慎志講師）で開催しました。

初めに講師による車いすバスケットボールの競技用車いすの高度な扱い方や、車いすバスケットボールのプレーを実演していただきました。その後、代表生徒が実際に車いすバスケットボールの試合を体験しました。見るのと実際にやるのとでは大きく違い、自分の乗っている競技用車いすが思い通りに扱えなかったり、シュートが届かなかったりと苦戦していましたが、応援の生徒も含め大変貴重な体験となりました。

最後に講師の方からご講話を頂きました。講話の内容について抜粋して紹介します。

- ・私は小学生の頃に少年野球をはじめ、将来はプロ野球選手を目指して頑張っていた。中学生の時、野球の仲間と喧嘩して、素直に謝ることが出来ずに不良の道に走った。そしてバイクで大きな事故を起こし、背中神経を傷つけ歩けなくなった。途方に暮れ、1年間自宅で引きこもりの生活を送った。その後、励ましてくれる友達のおかげでそこから抜け出すことが出来た。その友達には今でも本当に感謝している。ある日、友達と一緒に車いすバスケットボールを見に行くことになった。最初はあまり気が乗らなかったが、行ってみると選手たちがとても楽しそうにプレーしていた。なによりプレーする選手たちの笑顔が良かった。
- ・車いすバスケットボールと出会い「知ること」の大切さを知った。足が動かなくなったことで出来ないこともあるが、出来ることもたくさんあることを知った。
- ・車いすバスケットボールと出会い、パラリンピック選手となりアメリカで日本人初の車いすプロバスケットボール選手になることが出来た。この経験の中で、まずは何でもやってみることが一番大事だと感じた。しかし、失敗への恐れや周囲から笑われるのではないかと心にブレーキが掛かってしまうこともあった。しかし、メンタルサポーターの方にミラーの法則を教わり、自分が周りを応援することで前向きにポジティブに行動できるようになった。
- ・現役引退後、パラスポーツ普及活動のためアフリカに行った。そこには体育館がなく、気温40℃の屋外コートで車いすバスケットボールを教えなければならなかった。さらに、学校の授業では生徒たちは1冊の教科書を3～4人で共有しながら勉強をしていた。また、給食がないため昼食をとらずに勉強している状況を目の当たりにすると、日本は大変恵まれていることを痛感した。
- ・車いすバスケットボールをはじめて16年かかったが、車いすバスケットボール全日本チームのキャプテンになった。チャレンジに失敗はない。仲間を応援して、自分も応援してもらおう。たくさん友達を作ってチャレンジをしてほしい。

※ミラーの法則：世界や人はミラー（鏡）のように反射され、行いが自分に巡り巡って返ってくる事。

## 【試合風景①】



## 【試合風景②】



## 【集合写真】



## 【生徒の感想より】

最初は障がい者は「かわいそうなんだ」と思っていました。でもかわいそうなのは障がい者ではなく障がいを作ってしまう、気を配れない人なんだと思いました。障がいは障がいを持っている人のことを指していると思ったが、邪魔なものなのだと気づいてハッとしました。(Aさん)

どんなアスリートの選手でもしっかりとお世話になっている人や応援してくれている人に感謝の

気持ちを言葉に表せないくらい伝えているのがとても素敵だと思いました。

友達や親が自分の事を応援してくれているから、自分も感謝の気持ちを伝えながら、その応援に応えるため頑張ろうと思いました。(Bさん)

今日の授業を受けて障がいのある人ない人両方が楽しめる車いすバスケットボールはすごいなと思いました。また障がいの原因が無ければ障がい者ではなく普通の人と同じ。みんなが協力すれば公平な世界が出来ることを知りました。このことを多くの人に知ってもらい、よりみんなが過ごしやすい世の中になるといいなと思いました。ありがとうございました。(Cさん)

障がいとは障がい者自身が持つものではなく、普段生活している社会に存在するものという考え方や、多様性を認め合う事の大切さについては、これまではなかなか考える機会がありませんでした。今回の実体験を通していろいろなことを教えて頂き大変感謝しています。

※文書の内容は日本財団パラスポーツサポートセンターのホームページからも引用させていただいています。